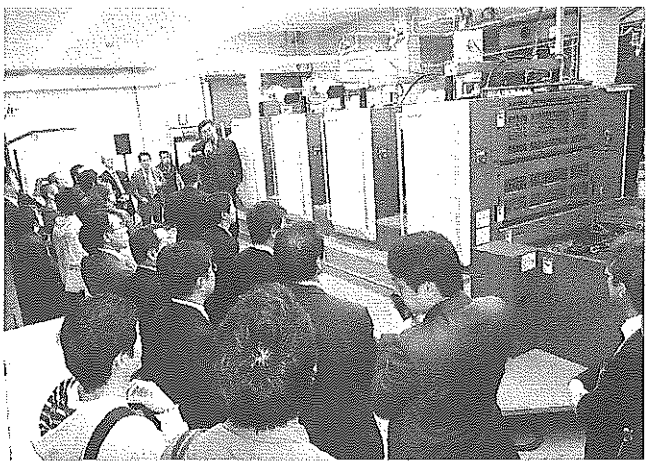
アグフア

太洋社で速乾実演

「3分乾燥印刷法」も紹介

日本アグフア・ゲバルト㈱(本社・東京都品川区、松石浩行社長)は4月20日、㈱太洋社(本社・岐阜県本巣郡北方町北方148の1、林初彦社長)で、アグフアフォーラム特別企画「現像レスプレート〝アズーラTS〟だからできる! 速乾印刷実演セミナー」を開催した。約80人の来場者が訪れたこの実演セミナーでは、UV乾燥装置を使わずに油性インキで速乾印刷を実現する「3分乾燥印刷法」を提唱する㈱東京テックプラス(本社・埼玉県朝霞市)の加藤隆行社長を講師に招き、そのノウハウを紹介する講演や、太洋社で稼働する菊全判4色印刷機での速乾印刷の実演などを行った。

林社長



速乾印刷のパフォーマンスを披露した

実演では、太洋社が全面的に採用しているアグフア社製の現像レスCTPプレート「アズーラTS」の規則正しい配列で細かな砂目構造が、速乾印刷をする上で必須となる湿し水の量を絞ることに非常に適していることを紹介しながら、スーパーユポ紙への片面4色印刷およびコート紙に4色印刷をどんてん打ち返しで両面印刷する速乾印刷のパフォーマンスを披露した。

会の中であいさつに立った、日本アグフア・ゲバルトの松石社長は、「速乾印刷のセミナーを昨年から開催し、もう10社以上で速乾印刷が実際に立ち上げられている。水を絞り、インキを絞ることで速乾印刷を実現するが、その結果として、きちんとした数値管理による印刷ができるようになるので、損紙も大幅に減らすことができる。現在、インキや紙の出荷量は減っているが、刷版の出荷量は増えている。これは、多品種小ロット化が進んでいる証だ。この速乾印刷では、1ジョブあたり80枚程度の損紙量に抑えることができるようになる。仮に、一般的な印刷会社で1ジョブあたり250枚の損紙を出しているとして、紙が1枚10円で計算しても、4色機1台で年間に670万円のコストダウンが図れる。今後、さらに小ロット化が進めば、損紙の量が増えるので、効果はいっそう大きくなる」と、速乾印刷をすでに手掛けている会社の事例を挙げながら、そのメリットの一部を紹介した。

また、太洋社の林社長は、「今、印刷業界は大変厳しい環境に置かれている。産業全体の出荷高は落ち、その一方で印刷諸材料の価格は上がるが、印刷価格はなかなか上げられない。その中でも生き残っていくためには、いかにして生産性を高めるかを追求しなければならない。その点において、速乾印刷には乾燥時間が早いということだけではないたくさんのメリットがあると実感しており、時代に即した技術だと思う」と、速乾印刷技術を習得しての感想を表した。

東京テックプラスの加藤社長の講演では、昨年8月から速乾印刷を始めている太洋社での事例を交えながら、自身が提唱する速乾印刷法について紹介した。

加藤社長は、速乾印刷を行うためにはコツや勘といったものを排し、数値に基づいた印刷管理が必要で、その上で、▽適正濃度での印刷(製品安定性)▽ローラー調整(インキ転移性の向上)▽湿し水管理(印刷安定性)――をすることが重要だと説明。そのためには印刷機のメンテナンスが何よりも重要となることから、日ごろからメンテナンスを自社で行うことを推奨した。そして、プリプレス側から受け取ったインキつぼデータどおりに印刷をすればすぐに色が合う状態になるようにメンテナンスすることが印刷オペレーターの務めであると説き、その結果として損紙も大幅に減少し、印刷品質も上がると語った。そのメンテナンスのポイントとして、インキングローラーのグレーズ除去やニップ調整、湿し水ロールの清掃、湿し水の管理方法などについて詳細に説明した。

A&I

切手やDMに有効

「薄型レンチキュラー」

㈱A&I(東京都新宿区市谷)は昨年10月から、0・18ミリの薄型レンチキュラーシートの販売を開始した。剥がれにくくスタンプしやすい薄さのため、オリジナル切手の素材として使用したり、DMハガキに貼

材だ。

A&Iが販売する薄型レンチキュラーシートはアメリカNGI社の製品で、昨年10月に同社との代理店契約により日本国内で販売が可能になった。厚さ2・48ミリ～0・18ミリのラインアップがあり、0・46ミリ～0・18ミリではUVオフセット印刷も可能だ。

このうち0・18ミリのシー

印刷博物館 P&Pギャラリー

トライアル2013「燦」

5月18日～8月4日

東京・文京区の印刷博物館P&Pギャラリーで5月18日から8月4日まで、グラフィック表現の可能性を探るグラフィックトライアル2013「燦」を開く。

同展は「グラフィックデザイン」と「印刷表現」の